

序 ビュシス 自然の歌を聴け

福岡伸一

人間とは不思議な生物である。脳を肥大化させたおかげで、経験から同一性を抽出して法則化し、特殊を集めて一般化し、本来はすべてが一回性の偶然である自然の中に、因果律を生み出した。つまり自然を論理ビュシスに変えた。ロゴスとは、言語、構造、アルゴリズムと言ってもよい。ロゴスの力で自然を、客観視し、外化し、相対化した。過去から未来を予言できるようになった。

ロゴスこそが、人間を人間たらしめた最大の力だ。このことで、風が吹けば飛ばされ、雨が降れば流され、日照りが続けばただ息絶えるだけの、他の生きものとは一線を画した生命を手に入れた。

それだけではない。ロゴスの作用の一番の成果は、遺伝子の掟おきてから逃れたことである。遺伝子の掟とは、端的に言えば、「産めよ増やせよ」である。しかし人間は、ロゴスの力によって遺伝子の命令を相対化できた。種の保存よりも、個の価値に重きをおけた。

科学は、ロゴスの輝かしい勝利である。その中でも、分子生物学がこれほどまでに科学の王座を勝ち得たのは、遺伝子がとてもロゴス的に見えたからだ。遺伝子はデジタル信号の配列で、それを書き換えれば、アルゴリズムが変更され、結果も変わる。生命の本質は情報である。ロゴスはそう高らかに宣言した。

本書の議論の中心命題もそこにある。生命を情報と見過ぎたこと、ロゴス化し過ぎたことが、いったい何をもたらしたか。今、切実に求められるのは、この反省の上にとった、ポストコロナの生命哲学である。

ロゴスの作用の一番の弊害は、自らの生命が、そして自らの身体からだが、最も不確かな自然ビュッスであることをすっかり忘れてしまったことである。ロゴスは、ロゴスで制御できないこと、

予測できないことを極端に恐れる。それは、ピュシスが本来的に持つ、不確かさ、不安定さ、気まぐれさだ。それゆえ、ロゴスは、そのようなピュシスの振る舞いを見て見ぬ振りをした。水洗トイレのフラッシュのように一瞬で視界から消した。浄化と清潔さを求めた。

ところが、ピュシスのピュシスたる所以は、それが、不意に、思わず、所構わず、もれ出してくることだ。溢れ出してくることだ。流れ行くことだ。今、再確認しなければならぬことは、最も身近な所有物であると思っていた身体が、ウイルスと同様の、最も制御不能な自然物であるという厳然たる事実である。

今、私たちが経験しているのは、ロゴスの裂け目から、漏れ、溢れ、流れ出しているピュシスからのリベンジである。漏れ、溢れ、流れ出ているのは、ウイルスだけではない。私たちの身体が、体液が、ピュシスとして振る舞っているのだ。

かくして、私たちは元の場所に戻らざるを得なくなる。そして、こう叫ばざるを得ない。自然の歌を聴け、と。

## はじめに——顕在化した危機の中で

藤原辰史

自然が奏でる歌を聴く。それはどんな行為だろうか。

歌うのは歌手ではない。場所はコンサートホールではない。楽器はバイオリンやトロンボーンではない。歌は、どこからともなく聴こえ、どこか知らないところへと消えていく。

川の水が岩にぶつかる衝突音、木の葉が地面に落ちる着地音、鯨が潮を噴きあげる音。

それらは、録音されるだけではまだノイジーな音の集合でしかない。歌として受け取られるためには、受け手の中で、それぞれのノイズが、肌触りを残しつつ、溶け合わなければならない。しかも、それが独りよがりの解釈にならないためには、複数の人たちの共同作業であるほうが心強い。

今、この共同作業が必要な理由は、この地球上に住む私たちの身体が新型コロナウイルスを体内に「受け入れた」からである（第一章を参照）。ウイルスの増殖は、これまであま

りにも国家や市場に捧げられ過ぎてきた身体に、ピュシスを吹き込んだ。もちろん、そこには多くの人々の死もあった。愛するものとふれ合えないもどかしさもあった。死者にさわれない遺族たちの悲嘆もあった。しかし一方で、人々の肺を苦しめていた大気汚染が緩和され、各地の空気が澄んだ。自然の運動に臨機応変に対応を続けるケアの担い手たちの世界的価値が再認識され、それをただ管理するだけで高収入を得ている人間には、「あなたの仕事は本当に社会にとって大事な仕事ですか」という言葉が突きつけられた。

そう、今こそ、自然に耳を研ぎ澄ますときだ。

私たち三人は、その歌らしきものが聴こえそうな場所を探し、そこに立った。それだけではない。音が次第に歌に変わるまで、じつと言葉を交わすことにした。地球に君臨する人間の五感はしかし、他の動物より優れているわけではなく、ここ数世紀の間にむしろ劣化の傾向にある。私たち三人もその劣化の只中に地球で暮らしている。ログスのたどり着けない領域には、言葉を積み重ねて、近似値に近づこうとする方法を選ぶしかない。本書は、まさに隔靴搔痒の記録である。

ところで、共同作業のメンバーは、同じジャンルの研究者ではない。異なったバックボーンを持っている。

一人は、かつて昆虫少年だった生物学者である。蝶の美しさの根源が知りたくて分子生物学を学んだが、その機械的生命把握の様式に疑問を抱き、動きながらバランスを取り続ける生きものの流動性、すなわち「動的平衡」を科学史と哲学を統合させながら捉えてきた。

その隣には、美学者がいる。かつて生物学者を目指していたが、それがあまりにも遺伝情報ばかりに注意を向けていたことに違和感を持った。そこで美学を学び、障害者たちの生きる世界を、かわいそう、助けなければ、という目線から一旦自由になって参与観察しつつ、生命とは何かという問いに果敢に挑戦を続けている。

さらに隣には、歴史学者もいる。高校時代は生物が好きだったが、文系を選び、戦争と飢餓の根源が知りたくて現代史を学んで、そのうちに生命体の死骸である食べものの歴史が果たした役割に関心を持ち、史料を探し続けている。

生物学、美学、歴史学。背景も、専門も、文章の書き方も異なる三人が、言語を交わし

合いながら、ピュシスの歌が聴こえてくるのを待つ、という、いわば、怪しい新興宗教のような儀式に参加したわけだが、私はなんだかとても楽しかった。なぜこの三人なのか、その理由は「おわりに」で明らかにされるが、ここでは後付け的に分析しておきたい。

第一に、三人とも、自然科学と人文学の狭間はざまに漂う存在であること。生物学者も美学者もともに「文転」したと自己規定しているように、また歴史学者も農学という応用自然科学が隣り合わせの研究を続けているように、文系と理系に分けるというロゴスからはみ出た存在である。アカデミズムの厳格な仕切り壁に、そもそも縁の薄い三人であるという共通点がある。

第二に、三人とも、哲学という、ある意味ではロゴスの権化のような存在に浅からぬ縁を持つこと。生物学者は、西田哲学を学び、それについての共著も刊行している。美学者は、哲学は美学の兄弟のようなものだと感じているし、歴史学者も哲学という名前がタイトルにある本を刊行したことがある。

第三に、三人とも、身体感覚に並々ならぬ思い入れを持っていること。頭で分らない場合は、現場に行ってみたくなる体質であること。身体がどう反応するか試したくなること。人間の身体は、生命体そのものである前に、生命体の棲家である。その身体がロゴス

の指令から外れた振る舞いを次々に繰り出す。歌は場合によっては自分の体内から響いてきてもおかしくない。

パンデミックの只中であって気持ちがふさがちであった私は、言葉を交わす中で、少しだけ前向きになれた。もっと具体的に言えば、地球規模の感染症が地球の住人に何か伝えようとしているように感じ、それを聴いてみたいと思うようになった。その多くがたとえ人間以外の地球上の生命からの人間に対する呪詛であったとしても。

たぶん、新型コロナウイルスがもたらす危機の多くは、人類史にとって新しい危機ではない。しかも、確認される危機のかなりの部分が、私たちが身近に感じてきたり、私たちが見て見ぬふりをしてきたりした危機である。「ポスト」(Post/後の) コロナの課題は、「アンテ」(Ante/前の) コロナの課題の継続もしくは発展であることが、ここでは確認されていくだろう。ポストコロナに新しい時代を創造しよう、と粹がる人も多いが、実際は、アンテコロナに山積した課題をみんなの課題として取り組むタイミングがやってきたと考えるほうが正しいと思う。



私たちはこの課題に向き合い、言葉を交わしてきた。その過程で自分の耳にときおり自然の歌のようなものが響いた感覚を、私たちは共有している。はたしてそれがどこまで深く読者が抱く危機感と共振するものなのか。読者諸賢のご批判を待ちたい。

# 目次

序	3
自然 <small>ビュシス</small> の歌を聴け	
福岡伸一	

はじめに——顕在化した危機の中で	6
藤原辰史	

第一部 論考・コロナが投げかけた問い	20
--------------------	----

第一章 コロナは自然 <small>ビュシス</small> からのリベンジ	
福岡伸一	22

『春と修羅』が語りかけること

「透明な幽霊の複合体」の正体

スペイン風邪との類似点

ウイルスを受け入れる

人間だけが乗り越えられた生命の掟

アルゴリズム一辺倒の危うさ

ウイルスは私たちの一部である

感染症は存在しない

なぜウイルスが存在するのか

ロゴスとピュシスの狭間で

自由を手放してはいけない

## 第二章 思い通りにいかないことに耳を澄ます

伊藤亜紗

体の多様性から見える世界

「みんな障害者になったね」

足し算の時間と引き算の時間

画一化がもたらしたこと

「さわる」と「ふれる」

人を信頼する快感

安心を求めれば信頼は失われる

ピュシスにさわる

強まる自己責任論

「道徳」と「倫理」を区別する

「聞く」ことの大切さ

### 第三章 コロナがあぶり出した社会のひずみ

藤原辰史

パンデミックと「歴史」の大転換

これは「新しい現象」なのか？

為政者の言葉に騙されない

甘い「罨」に警戒を

食べものを通じて広がる分断

真の文明国家とは何か

コロナ禍があぶり出した社会のひずみ

コロナ以前から存在していた危機

自らの身体感覚として受け止める

負の歴史から学ぶこと

## 第二部 鼎談・ポストコロナの生命哲学

### 第四章 漫画版『ナウシカ』の問いかけ

コロナ禍で読む『風の谷のナウシカ』

人間文明の行く末

パンデミックという人災

「消毒文化」の何が問題か

「クレンジング」は人類の欲望

潔癖主義は伝染する

「きれい過ぎる世界」への違和感

「敵の声」をひたすら聞く

『ナウシカ』が発するメッセージ

## 第五章 共生はいかに可能か？

ナチスの「共生」の裏にあったもの

科学を社会に当てはめる危うさ

これは「戦争」なのか？

「利他」を研究する理由

共感は万能ではない

インセンティブがはたらかないとき

システムの外に出る

ウイルスの「利他性」をどう考えるか

食べもののシステムを見直す

コロナ後の世界と「利他」

## 第六章 身体観を捉えなおす

---

コロナ禍で変わる身体観

「場」をともにするとはどういうことか

オンラインで会っているのに寂しい

沈黙が許されることの意味

分身という一・五人称をどう使うか

予測不能で自由な体

ピュシスとしての身体性を信じる

ままならない身体を受け入れる

## 第七章 ポストコロナの生命哲学

「もれる」と「ふれる」

納期主義からの解放を

歌がもたらす光と影

生命の進化の歴史が教えてくれるもの

病気が治るとはどういうことか

「治る」とは違う状態になること

「ドリトル先生」が教えてくれること

「感じる」力を取り戻すには

おわりに——ニューヨーク・京都・東京

伊藤亜紗



## 第一章 コロナは自然ビュスからのリベンジ

福岡伸一

『春と修羅』が語りかけること

二〇二〇年三月上旬、研究拠点のあるロックフェラー大学で春休みを過ごそうとニューヨークに渡った私は、新型コロナウイルス感染症対策の都市封鎖（ロックダウン）に遭遇し、彼かの地かに身をおき続けることになりました。

日本と同じく、アメリカでは当初、コロナ問題はまだ対岸の火事ではありませんでした。しかし、あつという間に感染爆発が起こり、世界最悪の感染拡大の中心地となったニューヨーク市では、渡航禁止を含めた行動制限措置が矢継ぎ早にとられていきました。

ロックダウン中、人通りも車の通行もほとんどなくなったニューヨークの街は、まるでSF映画のワンシーンのようでした。こうした異常事態が進行する間、私は生活必需品の

買い出しなどに出かける以外はずっと引きこもる生活をしていました。しかし、かえってそのおかげで、新型コロナウイルスの問題が私たちに問いかけたことについて、深く考える時間を得られたように思います。

コロナ問題というと、日々の感染者数や実効再生産数、あるいはソーシャルディスタンスといった直近の問題に目を奪われがちですが、私は生物学者として、この問題はもっと俯瞰的に、そして射程の長い視野から考えるべきことだと感じています。本当に必要なのは、いわば生命の哲学のようなものかもしれません。

なぜなら、コロナが私たちに問いかけているのは、言ってみれば、生命や自然とは何か、ということだからです。そして、人間が築き上げてきたこの文明社会というものがはたしてこのままでよいのか、あるいは、どちらの方向に行くべきなのかということも、コロナによって提起された重要な問いであると思います。

考えをめぐらす中で、私は宮沢賢治の『春と修羅』を思い出しました。賢治自身が「心象スケッチ」と呼んだ『春と修羅』は、非常に叙情的かつ大変難解な作品として賢治ファンの心を揺らせ続けていますが、コロナ禍におかれた私たちが文明社会の中の人間というものを捉えなおす上で、非常に重要な言葉が書かれていると、私は思います。

## 第二章 思い通りにいかないことに耳を澄ます

伊藤亜紗

### 体の多様性から見える世界

私が専門とする「美学」は、多くの方にとって、あまり聞き慣れない学問かもしれません。私はよく「美学は哲学の兄弟」と説明しているのですが、美学は哲学と同じように言葉を使い、じつくりと考えながら分析する学問です。ただ、哲学が「存在とは」「時間とは」などと、言語化された概念に向かって分析を進めていくのに対し、美学の場合は「そんなにすべてを言語化することはできないよね」というところから出発します。つまり、ロゴスの力を借りながらも、ロゴスを絶対視しないのです。

たとえば、芸術作品を見たときに受ける衝撃や、私たちの感性、あるいは身体感覚といったものは、あいまいで捉え難く、簡単に言葉にすることはできません。でも確かに私た

ちはそれを感じているし、それによって世界の見え方が一変するほどの衝撃を受けたりもします。そうした人間の「曰く言い難い感覚」について、あえて言葉を使いながら深めていく、それが美学という学問分野になります。つまり、美学はロゴスに対する警戒心を持つ学問なんです。

私自身、言葉に対しては愛憎相半ばする思いを持っていました。というのは、子どもの頃から吃音きつおんがあるので、言葉に対して常に距離があったんです。言葉がなかなか自分とフイットしない感じ。でもだからこそ「言葉って何だろう」と考える機会も多かったんです。そんな経験が、私を美学へと導いてくれたと思っています。

そんな美学という学問の中で、私は特に人間の体に興味を持って研究をしています。理系でも文系でも、人間の体は、非常に抽象化された「体一般」として論じられてきました。けれども、現実の体は、一人ひとり条件が違います。性別、身長、体重はもちろん、持っている体質や病気、障害の有無もそれぞれです。そうした現実の体の差をきちんと踏まえた上で体の研究をしたいと考えています。

具体的には、視覚障害の方や吃音の方、手足を切断された方のお話を聞きながら、そういう方たちがどのように体を使っているのか、そして、その体だからこそ見えて

### 第三章 コロナがあぶり出した社会のひずみ

藤原辰史

#### パンデミックと「歴史」の大転換

私の専門は農業の現代史で、とりわけ「食」について関心を持っています。二〇世紀という時代の中で、食や農業がどのように変化を遂げ、人口を急増させ、社会を変えてきたのかということ进行研究しています。

なぜ「食」かというと、単純に、私が食することが好きだということもありますが、二〇世紀は人為による飢餓が非常に多い時代であり、集合的な飢餓経験が時代を動かす原動力の一つだったということが挙げられます。日本の歴史を見ても、一九四五年前後は多くの銃後の住民が飢えに苦しんでいましたし、アジア太平洋戦争中には百数十万人もの日本軍の兵士たちが飢餓によって命を失いました。「飢え」の歴史を見直していくと、戦争の

悲惨さの本質だけではなく、戦後の消費社会の精神的背景も含めて、これまで見えてこなかった二〇世紀の姿が明らかになってくるのではないか、そう私は考えています。

コロナ禍も、「食」、そして歴史的観点からも非常に考えさせられる出来事であると言えます。

まず、私自身も含めた多くの人がそうだったと思います。皆で集まって飲んだり、食べたりすることがほとんどなくなり、家族以外の人と食事をする機会、さらには外食自体が激減しました。私の場合は、家でリモートワークをしていたわけですが、特に図書館も閉まっていた時期は「あの本が足りない」「資料が取り寄せられない」という状況で研究をせざるを得ませんでした。が、それによって、まずは自分の頭で考えてみるのが自然と増えていったように思います。岩波新書の「B面の岩波新書」というサイトに寄稿した「パンデミックを生きる指針——歴史研究のアプローチ」と題した文章（編集部注…二〇二〇年四月二日に公開され、一か月で五〇万を超えるアクセスがあり話題となった）は、そのようにして孤独に思索を深める中から生まれました。

担当編集者からの依頼は、「今のこのパンデミックの状況、とりわけ、二〇二〇年三月から始まった一斉休校によって学校給食が中止される中で、コロナと給食の問題について

## 第四章 漫画版『ナウシカ』の問いかけ

コロナ禍で読む『風の谷のナウシカ』

福岡 今回、伊藤さん、藤原さんとポストコロナの人間のあり方について語り合うという貴重な機会を得たわけですけども、ここでキーワードとなるのは「ピュシス」と「ロゴス」という言葉であると思います。新型コロナウイルスの問題は、まさにこのピュシスとロゴスがせめぎ合う有様をあぶり出していると言えるでしょう。

そのことを考えていくにあたり、ぜひ話題にしたいのが、宮崎駿はやおの『風の谷のナウシカ』です。『ナウシカ』はアニメーション映画も有名ですが、ここで言う『ナウシカ』は漫画版（徳間書店）のほうで、私がニューヨークでロックダウンされている間、宮沢賢治の『春と修羅』の他にもう一冊、読み返してみたいと思った本でもありました。また、伊

藤さんや藤原さんの本棚にも『ナウシカ』の漫画が全巻並んでいると聞いて、『ナウシカ』についてもぜひ話題にしたいと思ったわけです。

伊藤 漫画版『ナウシカ』は、私の世代にとってすごく親近感がありますし、小さい頃から何百回と読んでいます。

藤原 私は弟が購入したものを実家に帰ったときにたまに読んでいましたが、二〇一七年に、『ナウシカ考』（岩波書店）を執筆した赤坂憲雄さんと雑誌で対談するために、きちんと取り組もうと思つて全巻購入しました。もう夢中になりました。

人類は今、新型コロナウイルスという、今まで私たちが生きてきた人生の尺の中では感じたことがないようなピュシスの力を感じざるを得ない状況におかれています。『ナウシカ』は、ウイルスのような生命を脅かすものであつても、それとどう折り合いをつけていくのかということについて、大きな示唆を与えてくれる作品だと思ひます。

伊藤 このコロナ禍において、『ナウシカ』はとても重要な作品だと私も思ひます。

新型コロナウイルスの世界的流行が明らかになってきた二〇二〇年三月末、アメリカに住んでいる美術史の研究者の友人に『ナウシカ』の英語版を送りました。彼女はもともとニューヨーク近代美術館のキュレーターだったので、以前会つたとき、「今度、『共



## 第五章 共生はいかに可能か？

ナチスの「共生」の裏にあったもの

福岡 『ナウシカ』の物語について語り合う中で、ノイズ、あるいは自分の思い通りにならないものとの「共生」が大事だという話が出てきました。ある意味、ウイルスも私たちと共生しているわけですし、ポストコロナの時代を生きるにあたっては、自然環境との「共生」はますます重要になってくると思います。私たちは完全にロゴス化された社会で生きることはできないし、完全なピュシスの波にのまれることもできない。つまり、なんとかその両者とうまく動的平衡を保ちながら生きていくしかない、これが本当の意味の自然や環境との共存ということなのだと思います。

ただ、「共生」はそれほど生易しい概念ではありません。「共生する」と言うのは簡単で

すが、それは理想的に語られるものであって、実際に行うは難し、でしょう。「共生」という言葉は矛盾に満ちていて、表もあれば裏もある、光も影もある、生も死もあるものです。私たちはそんなあやふやなものあいだでしか生きられないというのが、ある種の真実だと言えるでしょう。

たとえば、藤原さんのご専門である農業史、あるいは食の歴史から見て、「共生」とはどのようなことだとお考えでしょうか。

藤原 農業史や農学の中では、「共生」という言葉は古くから使われてきたもので、たとえば一九一九年にリヒャルト・クリツイモフスキーというドイツの農学者が『農学の哲学』（邦題『農学原論』橋本伝左衛門訳、西ケ原刊行会）という本で共生について語っています。クリツイモフスキーは、農業において経済的に利益を得ることは重要な目的だとして、その一方で農業は家畜や植物と共生していくための重要な産業であり、農業が単に人間の自己中心的な利益獲得のための道具になり、土壌や植物、動物たちに大きな暴力を振るうようなものになってはならない、と訴えました。彼の主張は今の有機農業の理念にもつながるもので、実際、一九二五年頃から徐々に広まっていった有機農業によって実現されていったとも言えます。

## 第六章 身体観を捉えなおす

### コロナ禍で変わる身体観

福岡 今回のコロナ禍で、「新しい生活様式」のような表層的なスタイルではなく、もっと根本的な変化が必要だということを私たちは突きつけられたと言えます。伊藤さんから「ニューヒューマン」「ニューライフ」「ニュー体」という言葉も出しましたが、真に「新しい」私たちのあり方とはどのようなものなのか、改めて考えてみたいと思います。

たとえば、コロナ禍で突然強制的にステイホームや三密の禁止といった、直接的な身体性への制限が行われたわけですが、私は、これはロゴスによってピュシスが制限されるということであり、生命にとって非常に危険なことではないかと感じています。

藤原 私も、コロナ禍でテレワーカーや学生たちの身体観が非常に薄れていると思います。

今、私たちはマスクなしでは外出できない状態にあるわけですが、そもそもマスクという口をふさぐ物体はいったい何を意味しているのか、考えざるを得ません。今もアメリカなどでマスクをしない運動がありますが、スペインシユ・インフルエンザのときにも反マスク同盟というものが生まれていました。

伊藤 コロナ禍で、外に出て行って人と接触し、自分が変わるという経験をしにくくなっていますよね。結果的に、体を動かすことが先で考えが後からついてくるという経験をしにくくなっているというのは、大きな痛手だと思っています。

外に出て行って行動することがなぜ大事かと言えば、「自分なんてこんなもんだ」と狭い世界に閉じこもりがちな自分が変わるような発見があるからです。外に出ないことで、自分で考えた狭い世界にどんどん凝り固まっていくのではないかと危惧しています。

藤原 そこはどのように打破していけると思いますか？

伊藤 外に出ていけないのだとしたら、せめて家の中で体を動かすということができるかもしれません。たとえば、私は大学で芸術を教えていて、学生に作品をつくらせたりするのですが、そういう作業は自宅でやるほうが、おもしろいものができてくるんです。大学で行う授業では、「こんな作品をつくりたいです」というアイデアがあっても、材料が

## 第七章 ポストコロナの生命哲学

「もれる」と「ぶれる」

福岡 私たちがこれからコロナと共存していくためには、やはり、長い射程を持った生命に対する見方、つまり、生命哲学というようなものが必要になってくると思います。

これまで、ポストコロナの人間のあり方という大きなテーマについて、三人でさまざまなことを語り合ってきました。議論をまとめる最後の問いは、コロナ禍を経験した私たちにとつての「新しい生命哲学」とは何か、ということになるでしょう。私の考えを一言で言うならば、村上春樹の『風の歌を聴け』（講談社）ではないですけれども、やはり「自然の歌を聴け」ということではないかと思えます。

これまで何度も述べてきたように、脳を肥大化させた人間はロゴス化された文明社会や

都市を生み出し、ある種のアイデアを求めつつ生きています。そうした中で、ピュシス的なものはどんどん整理整頓されていくように見えますが、時々それが意外な形で表れてくる。いわばピュシスからのリベンジを経験しながら、ロゴスとピュシスのあいだを右往左往している生命体が人間です。人間はロゴスによって「産めよ、増やせよ」というピュシスの呪縛から逃れることはできた一方、何もかもロゴスの力で抑圧することはできないということです。

このコロナ禍もそうしたピュシスからのリベンジと言えますが、そうした中で、藤原さんは『縁食論』（ミシマ社）、伊藤さんは『手の倫理』という素晴らしい本を出されました。ロゴスで抑えようとしても抑えきれないピュシスのことを、それぞれのご著書の中で、藤原さんは「もれる」という言葉によって、伊藤さんは「ふれる」という言葉で表現されています。「もれる」は、たとえばうんちやおしっこがもれる、あるいは選考からもれるなど、ネガティブなイメージで捉えられています。江戸中期の思想家・医師の安藤昌益しやうえきが『統道真伝』で「もれる」を生命の根源を表す言葉として用いていると、藤原さんは『縁食論』の中で指摘しています。また、伊藤さんは、ある意味ロゴスを伝達するもの、探る、スキヤニングする行為としての「さわる」に対し、「ふれる」という言葉には生成

おわりに——ニューヨーク・京都・東京

伊藤亜紗

白状しよう。

福岡さん、藤原さん、伊藤の三人は、実は対面で会ったことがない。「生命哲学」を標榜しておきながら、わたしたちのうち誰が一番背が高いのかとか、嬉しいとどんな癖が出るのかとか、疲れるとどんな顔になるのかとか、そんなお互いの生きものとしての基本情報すら知らない。同じ釜の飯を食ったことがないどころか、同じ部屋の空気すら吸ったことがない。わたしたちはまだ、お互いにどこかバーチャルな存在である。

コロナ禍という状況に加え、福岡さんはニューヨーク、藤原さんは京都、わたしは東京と居住地もばらばらであった。本書に収録されている鼎談はオンラインで、つまりインターネットという情報技術に支えられながら、電子的に再構成されたお互いの姿を見つつ、言葉を用いて行われた。つまり、それはきわめてログスのなやり方で収録された。

このような語り合いを可能にしてくれたテクノロジーに感謝しつつも、生命について語る空間がきわめて非生命的であった、というのはいはりコロナ禍ならではの皮肉である。福岡さんのガラパゴスの話も、藤原さんの土壌の話も、わたしは空調設備の調った自宅の子ども部屋で聞いている。

毎日何時間も画面に向かい、オンラインで人とやりとりする日々を、わたしたちはもう一年半近く続けている。

それは言ってみれば、体は限られた生活圏の中に閉じ込められたまま、いかに今・ここにはないもののことを思うか、そんな想像力の修業のような時間であったように思う。

鳥取県は智頭町に、タルマリーというパンとビールの工房がある。この工房の特徴は、パンとビールをつくるのに野生の菌を使っている、ということだ。つまり、もともと空気中に存在していた菌を採取し、その力を借りて発酵を行うのだ。

オーナーの渡邊格さん・麻里子さん夫妻が著した本は、その名も『菌の声を聴け』である。「ピュシスの歌」の、たぶんその一部である「菌の声」。確かに菌の声は、ピュシスの歌を構成する声部の中でも、もっともいたるところから聞こえ、もっとも精妙な調べを持



つぎわめきなのもかもしれない。

夫妻が野生の菌たちを集める方法は一見とてもシンプルである。たとえば麴菌であれば、竹を割った皿に蒸した米を盛り、それを数日置いておくだけ。菌が好きそうな環境を整えておき、彼らが自ずと集まってくるのを待つのだ。「つかまえる」でなく「降ろす」。「菌との暮らしが深まっていくと、彼らの動きや喜びがわかるようになってくる」と渡邊さんは言う。

しかし、その見た目に反して、この作業は実に複雑で難しい。というのも、麴菌を降ろしたいと思っっているのに、ちょっとしたことでも狙いとは違う黒や赤色のカビが増殖してしまうからだ。

なぜうまくいかないのか。渡邊さんは菌の声に耳を澄ます。聞こえてきたのは「工房の外が大事」というメッセージであった。そう、工房の中に置かれた米にどんな菌が降りるか、工房の中の条件をいくら整えてもだめで、工房の外やさらには敷地の外、おそらくは隣の町の要因にも左右されるのだ。

たとえば八月のお盆休みになると灰色のカビが増える。それは山の中とはいえ、お盆休みの帰省客で車が増えるからだ。黒カビが出ることもある。それはこの地域の田んぼにへ

リコプターで農薬散布が行われたあとだ。どうやら菌は、私たちの目に見える範囲よりもはるかに広い環境を映す鏡であるらしい。

そのときにどんな菌が増えるかは、もはや「因果関係」のような静的でロゴス的な思考法では、決して捉えきることができない。渡邊さんはそれを「縁起」と呼ぶ。縁起は、動的に変化する無数のものたちが織りなす偶然のネットワークだ。

というわけで、今はただ、生身の福岡さんや生身の藤原さんとお会いしたときに、そこにどんな菌の歌が生まれるのかを楽しみにしている。本書で藤原さんが語っていたように、わたしたちの体は、さまざまな菌たちにとって居心地のいい住処だ。そしてその菌たちのはたらきが、わたしたちの免疫系を調整し心理状態をつくり出しているという。人と人が会えば、お互いの菌を交換することになる。わたしたちの出会いには、どんな縁起の運び手になりうるのだろうか。

直接会うことの叶わなかったこの間、菌の代わりにわたしたちをつないでいたのは菌についての漫画であった。そう、漫画版『ナウシカ』である。

そもそも、この三人が知り合うきっかけとなったのは、二〇二〇年八月一日に放送されたNHK・BSの「コロナ新時代への提言2」というインタビュー番組である。別々に収録されたわたしたち三人へのインタビューを編集によって一つのストーリーにまとめあげた内容で、基調をなすテーマが「ナウシカをヒントにコロナ後の時代を考える」であった。ナレーションは、アニメ版でナウシカの声を担当している島本須美さん。幼い頃からのナウシカファンとしては、この上ない贅沢な経歴である。

しかし、ナウシカを基調にするという案は、最初から決まっていたわけではなかった。きっかけは、ディレクターの長友祐介さんが、藤原さんとわたしの研究室のロケハンをしたことである。本当にたまたま、藤原さんの研究室にもわたしの研究室にも漫画版ナウシカ全巻が置いてあり、それを長友さんが発見したのだ。そしてそのことがニューヨークの福岡さんの耳に入る。福岡さんがただちに反応して、あれよあれよという間にナウシカを軸とした番組構成案が膨らんでいった。

そう思うと、この出会いもまた、縁起的でありピュシス的である。あの番組は、計画の枠組からもれ出たものが、長友さんといううつつわに受け止められることによって、形になったものだった。このような時代状況で、ロゴス的な出会い方しかできなくとも、その中

にピュシスの芽があることを、噛みしめなくてはならない。

番組で語った内容に各自が大幅に加筆をし、さらに別途オンラインで行った鼎談を加えたものが本書である。本の編集にあたっては、集英社新書の細川綾子さんが力になってくださった。遠隔の著者たちをつなぎとめる細やかな気遣いに、心から感謝したい。

そして最後に改めて、物理的な距離を越えてわたしのつたない言葉を受け止め、また返してくださった福岡伸一さんと藤原辰史さんに、心からお礼を言いたい。お二人とともに、今わたしたちがその中にいる世界的な危機について、もっとも深いところから言葉を探す作業ができたことは、今後ものを考える上での道標となってくれるはずだ。

日々の生活の中で、わたしたちはつい短期的で功利的な視点にとらわれてしまいがちだ。本書が、読者のみなさんにとって、少しでもそうした視点を離れ、遠く、あるいは深くに視線を投げかけるきっかけとなれば幸いである。